

随想（その1）



矢野克巳

Katsumi Yano

1928年 大阪府堺市に生まれる

1953年 日本設計工務(株)大阪事務所(現(株)日建設計)

1981年 東京本社代表

1999年 (株)日建設計退職

社会と構造設計者

Structural Engineers in Community

J S C Aの誕生

構造家懇談会設立の動機は、木村俊彦さんからの手紙でした。「梅村先生を中心に耐震設計の指針を大改定する準備が進行中です」とあり、委員構成は設計者が少ないことが分かりました。学者がまとめるのに異議はないが、設計者側の意見を広く求めていることが大変残念でした。内容が見えてきた時期に、早稲田大学の石井先生から呼び出しを受けました。谷先生もご同席で、新しい指針の方向をどう思うか訊かれました。石井先生は反対したいようでしたが、私は良い方向だと思つて申し上げ、谷先生が同じようなご意見でした。地震という不明なことが多い事象に対する設計法としては、数値はともかく、両者には夫々の良い所があるように思いましたが、今になって考えてみると、設計者としては何か大きい忘れ物があったと思います。

構造設計者の地位が低いことに反発し、先輩や同輩などを訪ね歩き、各位

の事務所やお宅に集り協議を続けました。そして構造家懇談会Japan Structural Consultants Associationが設立される運びとなりました。数十人の設立総会は、建築士会連合会大田会長や谷・金井・大崎・柴田先生方と横山不学先輩のご出席を頂き大いに氣勢を上げました。私は感激の余りはしゃぎすぎて大崎先生からたしなめられる始末でした。

そのときに柴田先生から、会員は50名程度が適当と思うとのことのお話も聞かせて頂きました。この問題は社団法人化まで終始議論の種でした。私はエリートサロンでなく、構造設計者の評価が適切である社会システムを作りたいとの思いでした。規準等の作成に参画することも大切ですが、建築士が実態として専門分化している現実を反映する社会システム創りを実現したかったのです。

石井先生は数少ない学者と設計者であったことがあのような発言となったと思います。学術の進歩と、未知の面が多い地震に対する設計技術とをどうバランスをとってゆくかも問題です。

志を高く

構造家懇談会は、諸兄の努力により1981年に発足できました。設立趣意書は、木村さんの格調高い名文ができました。構造技術者を幅広く考え、しかし、レベルは高く考えた会則もでき、倫理規定も英国を参考に作り上げました。

専務理事には建築家で集合住宅設計の雄である永松さんに僭越ながらお願いし、会誌は井上博さんが中心で推進して下さいました。

会員をどう規定するかは大問題でした。建築士で計算を担当しているだけではまずい。志は高く持ちつつ、現実的な姿は何かについて多くの議論を積み重ねました。活動方針を決める会議では、常に激しい討議がありました。発言は専ら木村・久徳・井上・矢野でしたが、山口・木田両氏の顔を見ながら私は結論を作ることに努めた心算でした。結果は、そうでもないよと諸兄に言われそうですが。会員資格は建築



構造家懇談会発足時の理事（前列左より山口、掛貝、矢野、木村、市川。後列左より井上、村田、木田、青木豊）



ASCE大会でゴールドラッシュ時代の仮装パーティーに出席した国籍不明の二人（ジャック井上氏と共に）

士より高く、技術士並みであり、実務経験と設計能力を重視した制度となりました。

社団法人へ

会員が増えてきました。そこで社団法人化が目標となってきました。建設省建築指導課と接触を重ね準備を進めましたころ、指導課の梅田様からはエリートの団体を作るのは自由だが、関連諸団体と意見調整をしておくようにとご注意を頂きました。早速、各団体に働きかけましたが、注文が付いたのは2団体でした。士会連合会からは会員が減らないよう求められました。これは早速会員に働きかけ、逆に少し増えることになりました。建築家協会は丹下会長にお会いした際に、構造「家」は建設業者の社員が含まれる団体では使って欲しくないと強く指摘されました。皆と相談の結果、「構造技術者」との呼称と変えました。政界への働きかけもしました。斉藤建設大臣は青木豊さんのご親戚でした。法人化する時点では、片山局長は大学時代では村田さんの後輩で論文指導を担当した仲でし

たし、天野大臣は中曽根派秘書会各位と私は常に会う関係であり、掛貝さんは大臣のマージャン仲間でした。大臣室でお会いすると、さすがは政治家で理解が素早く感心致しました。目出度く法人化を認めていただき、片山局長のお立会いの下、証書を戴きました。構造家懇談会は8年で役目を終えました。

法人化の披露宴は帝国ホテルとし、盛会に開くことができました。法人化最初の1年のみ会長をして、私の役目を果たし終えたと思いバトンタッチをしました。

[ここに記しました方々には、故人となられた方が多く居られますが、当時の職名とお名前を用いました。]

社会の変化と共に

技術の変化がもたらした問題は、何よりコンピューターの普及です。ついに、国が認証するソフトが出るに至りました。そこへ、経済性を追求することが重視される風潮が加速され、目的のためには手段を選ばない、それがどうゆう性能を持った構造となるかを考

える能力を失い、ソフトを操る能力があるだけの計算屋に成り果てる人が出るようになりました。構造家懇談会が目指したものは全く逆の人が、同じ職能者と見られる怖れが増えてきました。更に、国家資格となると資格試験の判定が機械的にできるような試験のみになる怖れがあります。会としてはどのようにそれを防ぐシステムを準備するかが、目下の問題でしょう。寺本さんがそのことを心配した文を出してくれていますから安心しましたが。構造家という職名は使わなくても、志は忘れないで欲しいと願っています。構造性能は建物に応じたものです。法令や規準類はどうしても画一的になります。それらのみで設計することは、設計者の責務を放棄したことです。そうならないように今後も努力を続けて行く必要を感じます。

技術以外の変化も大きく、国は消費者庁を作る時代です。ましてや、設計者は建主と同時に使用者・社会の方を向いているはずですが、構造設計者は如何でしょうか。例えば、耐震性能については使用者が求める性能について無関心な人が多いのではないのでしょうか。設計者の専門分野の中に閉じこもっては社会の信用は得られません。この件は第2回で、国際化が進む時代の対応を第3回で書きます。

最近のJSCA

最近のJSCAは社会への働きかけを活発にしていることに感心しています。こんなに積極的に働きかけ、また、社会に期待されていることは隔世の感であり、嬉しいことです。

会員資格をどうするか、充分議論してゆくことが重要でしょう。



社団法人日本建築構造技術者協会設立披露宴会場で(左より矢野、木村、山口、久徳)